生まれた順で発達差

富大など、乳児対象に調査

同じ母親から生まれた第1子と第2子を生後6カ月時点で比べると、第2子で発達の度合いが低い傾向があったとする研究結果を、富大などのチームが米医学誌に発表した。わりが第2子で少ない傾向もあり、発達差に影響した可能性がある。生後12カ月で差は縮小していた。

学童期以降で第1子の学力が高いなどとする研究は過去にあったが、乳児を対象にした研究は珍しい。環境省の「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」のデータを使い、最大3歳差のきょうだい2117組を分析した。

チームは、高い声を出せるかなどの「コミュニケーション」、全身を使う「粗大運動」、物をつまむ「微細運動」、隠した物を探すかどうかといった「問題解決」、ボール遊びのやりとりなど「個人・社会性」の5領域について60点満点の発達スコアで比べた。

すると、6カ月では全ての領域で第2子のスコアが低い傾向がみられ、平均して個人・社会性で約14点差、微細運動で約6点差があった。12カ月では、それぞれ約5点差と約4点差に縮まり、その他の領域ではほぼ差がなくなっていた。読み聞かせや屋外活動などで保護者が関与する度合いも調べると、第2子で低い傾向があった。